

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	Balzacの初期の哲学思想(II) : 最初の論文《Dissertation sur l'homme, son génie》
Auther(s)	長崎, 広次
Citation	フランス文学 , 10・11 : 68 - 80
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040901">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040901</a>
Right	
Relation	



## Balzac の初期の哲学思想 (II)<sup>1)</sup>

### ——最初の論文 《Dissertation sur l'homme, son génie》——

長 崎 広 次

1

Balzac が題目をつけずに書残しているこの論文の原稿は、Spoelberch de Lovenjoul によって誤って二つの論文に分類され、*Sur l'origine du langage* (Lov. A 166 folios 3-5) と *Dissertation sur la nature, l'homme, ses facultés* (A 166 folios 6-9) と題目をつけられて現在 Chantilly の Bibliothèque Spoelberch de Lovenjoul に保存されている。しかし文脈とその論理とを一貫させる努力を払うならば、後者の folio 7 に前者の folio 5 が続き（各々の folio 3 と 6 は題目の頁）folio 5 の裏と8の表との各々の欄外の加筆を Balzac の送り符号に従って交錯させ、folio 9 に進むことによってこの論文の整った脈絡が理解できるのである。残った前者の folio 4 は、前者における言語理論の未完の書換えである。

この哲学論文は未刊のまま今日に至っていたため、1968年夏に、3年前 Chantilly で写真にしたこの原稿の校訂テキストの公表を、微力な私が身のほど知らず企てたのであるが、Henri Gauthier 氏が *L'Année balzacienne* 1968 に、極めて周到綿密な研究を添えた、この論文のテキストを公表されたため、当然私はこれを中止することにした。添えられた Gauthier 氏の研究は到底私の現在の能力と資料とによっては到達し得ぬ水準のものであった。従って本稿は進んで同氏の成果の恩恵に浴した結果となり、同氏の優れた研究に負うところ多大である。ただ、この哲学論文の題目を Gauthier 氏は《Dissertation sur l'homme》とされたが、その主題には、人間とその魂、その能力、その感覚、その観念等の研究を通じて、天才的能力の原因を究明しようとする意図が明白に含まれているのであるから、私はその題目を《Dissertation sur l'homme, son génie》としたいと思う。しかしこの論文は未完成であり、この所期の意図と目的とは果されずに終わっているのである。

Balzac は、1819年8月4日以後の執筆と推定される Descartes 批評のノートの一文中にカッコを付して (ceci, par rapport à mon système sur l'âme et les sensations) と註をつけている (A 157, f° 95 裏)。この自負に満ちた《mon système》は、A. Prioult 氏や Gauthier 氏の指摘するように、*Dissertation* で展開された système に該当していることには、疑いの余地はない。何故ならこの Descartes 批評の上記の註は Balzac が idées を二つに分類し《les idées naturelles seront simples et les idées rationnelles complexes》と述べている個所の直前であり、*Dissertation* における idée の分類法に一致しているからである。従って1819年に Balzac の脳裡に喚起されている《mon système》が展開されている *Dissertation* もこの前後に書かれたであろうことが一応推定されるが、更に魂の能力の分析が1818年執筆と推定される *Notes sur l'immortalité de l'âme* におけるよりは<sup>1)</sup>精密になり体

系化されていることから、また他方この論文執筆に用いられた用紙に関する Gauthier 氏の詳細な考証<sup>2)</sup>からも、*Dissertation* の執筆時期を1819年の間と推定することが許されるであろう。

この論文は、身内で天才への野望に燃えていた20才の若き Balzac が、天才的能力の本質と条件とを「魂の不滅についてのノート」で既に示していた Cabanis 流の感覚論の哲学的立場から追求しようとする極めて野心的な意図のもとに書始めたものと考えられる。彼は序言に当る部分の終りのあたりで、「天才的能力が我々に示す問題を現在解決し得るとは私は信じない」(f° 7裏, f° 5表)<sup>3)</sup>と断わり、「唯々恐ろしさに震えながら私は若干の考察を敢えて呈示する」(f° 5表<sup>3)</sup>)とは告白しているものの、彼の野心は無残に碎かれ、天才論の単なる序論に終わっている。人間の天才的能力がなし遂げた奇蹟を描写する、原稿の第1枚目は文字は大きく入念に書かれ、削除修正は少なく、思考に何らの渋滞の跡は見られないが、その裏面の終りのあたりから後は、文字は小さくなり行間はつまり、第2枚目(f° 5)以後、言語理論と思考の心理学的問題に近づくや、削除、書換え、paragraphe 全体の削除、行間書加え、送り符号による欄外余白書加えが極めて多く、Balzac の推理作用の躊躇逡巡、その表現手段発見の当惑と困難の跡を示し、遂に未完に終り、彼の思想展開の苦渋を物語っている。恐らく Balzac は、既に秩序づけられた体系を展開したのではなく、書きながら範疇や概念の分析を試みたのであろうことが推定されるのである。

## 2

この論文は、人類が今日まで築きあげてきた文明の業績に対する Balzac の深い感歎の念で始まる。人間は自然の「細小の物質をも我々の欲求に従わせ」「自然の傑作に匹敵する」文明の傑作を創造した。人間の「利害関係は、すべての科学を含む、文明、法律、戦争を、すべての芸術を包含する奢侈リュツクスを開花させた。」海洋は征服され、天空は観測され、「数学者は天体空間を遍歴し、天体法則を見抜いているようだ。」こうした奇蹟の後で、「人間はそれをほめたたえ、神さながらに自らを不滅なるものと信じた。詩人の歌声が響きわたった。その時……感歎の念に、うちがちがたい穿鑿癖リュツクスが加わる(f° 7表<sup>4)</sup>)。ひとは自然の秘密を押えたいと思い、人間がこの偉大さの頂点に到達するまでの相次ぐこうしたすべての努力と、こうした創造との原因を知りたいと思う。しかし尋ねられた学者は、この原因は天才的能力 *génie* であると答え、我々の好奇心に唯一言を報いるのである。」

しかし「人間の学問に、その始めから、その統一と、海に注ぐ大河に見られる力と速度との絶えず増大する進展とが存在したならば、我々は更に進歩しているであろう」が、学問の進歩を嫉妬する力が存在しているようで、進歩の時代が続いてこれを阻む野蛮と無知の世紀が現われるのである。この力は、自然の神秘が破られるのが不安なようで、この神秘を守ろうとするが、「他方、これに驚いた人間は、発明力を蓄えた天才が未知の聖域に侵入し得るまで、破壊の跡のある学問の殿堂を絶えず再建しなければならないのである。その時人間は恐らく自らを知るであろう。その時人間の魂と天才の火とを知るであろう、そ

してもろもろの第一原因はもはや秘密ではなくなるであろう。」(f°7裏<sup>5)</sup>)

科学の進歩に対するこうした深い信頼は若き Balzac の個人的な信念であったと同時に、この時代の反映でもあった。既に18世紀の *Encyclopédie* はこれを宣揚していたが、人間の無限の完成可能を主張する Condorcet の遺稿 *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* が1795年に、Condorcet の著作集は1804年に刊行された。1807年には Chénedollé が叙事詩で《Génie de l'homme》をほめたたえる。Madame de Staël は *De l'Allemagne* のなかで、時代から時代へと集積される思想の増大は「人間精神の完成可能性」に有利であり、「すべての階級とすべての国における文明の相つぐ進歩」は「人類の完成可能性」を裏づけるという考えを表明する(1814年第2版序文)。Cabanis, Charles Bonnet, Victor Cousin も科学の進歩に信頼をおいていた。

魂の本性と天才の本質との秘密の真の解明を未来の科学に期待している Balzac は、当代の科学の水準においても、また当時の彼の能力においてもこの問題の解決が不可能であることを自認しつつも、天才の条件の分析を目標としていることの明らかなこの論究執筆の動機として、「問題の明白な矛盾とそれから生じ得る文学上の邪説が私の注意をひいた」(f° 5表<sup>6)</sup>) ことを挙げているのは、恐らく天才の非科学的な神秘主義的解釈を批判する意図を示しているものとみてよいであろう。またこの論文のテーマ選択の動機に関しては、1819年秋妹 Laure への手紙で<sup>6)</sup> Cromwell 執筆に関して天才への野望に燃えながらも天才能力を証し得ない苦悩を切々と訴えていることから察しても、生涯の冒険への出発にあたっての彼の個人的な体験上の問題が、その動機に潜められてはいないだろうか。成功は正確な手段に依存するものであり、天才は恐らく方法の問題であろうことを信じて、この方法の探求を理論的体系的分析に期待したことも推定し得るのである。

「コルネイユにラシーヌにホメロスにウェルギリウスに彼等の才能の謎を尋ねなければならなかった」が、「墓は彼等の返答の秘密を守る」ので、「彼等の感歎すべき記念碑の周囲をまわり得るのみで建築家の秘密を見抜き得ない」(f° 5 表<sup>7)</sup>) Balzac は、天才の条件を原理的に解明し「何が我々を詩的天才に導かざるを得ないか」(Ibid.) を理解しなければならないのである。

「すべての曖昧さを避けるために私はもろもろの原理に遡りこれを確立しなければならない。最初に génie なる言葉を解明することから始めよう。それから génie を普遍的に考察しよう。最後に本質として捉えられた génie が génie そのものと異なるかどうか、何が我々を詩的天才に導かざるを得ないかを知ろう。」(f° 5 表<sup>8)</sup>)

原理に遡ることは Balzac の精神の特質の一つである。そしてこの頃の彼の思考法には Descartes 的方法に感覚論的実証主義が加わっている。Descartes 的方法に従って概念を規定しようとし、恐らくは、天才の成功を言語の進歩に依存させた Condillac の影響のもとに、言語理論の展開から始めたのではあるまいか。

言語の機能、起源およびその分類を扱った部分全体がより整備されて書換えられたものが、folio 4 であると考えられる。最初の原稿の、「抽象語」が説明されている paragraphe

全体の余白には «Il y a à corriger là» と書かれているが (f° 5 裏<sup>9)</sup>), 後にこの部分のみならず言語理論の全体が書き換えられたものが, folio 4 であるに違いないのである。従ってこの部分は folio 4 によって紹介しよう。

Balzac は言語の定義から始める。言語とは, 見える対象を, 感じる感覚を, こうした対象間の, こうした感覚間のすべての関係を人間が人間に描く技術である。この困難な目的に達するために, 先ず変化する音に頼る, そしてその様々な方法が単語を形作り, それが糸が布を織りなす如く話を構成する。次に彼は言語の起源の問題を素描する。「言語の創造には人間の精神に幾多の労苦が求められ, 愛や宗教の言葉を口にして, これを相手に理解させ得るまでには, 多くの世紀が流れたに違いないので, ひとびとは, 最初の間はその痕跡の残っていない神の言葉を話したと考える方が簡単だと思ったのだ。」(f° 4表<sup>10)</sup>) 彼はここで言語の問題に関して一步一步人間や学説を辿るのは無益だとし, 言語の状体の検討でこと足りるとして, 言語の普遍的分類に入る。

「最初に発明された言葉は, 馬 un cheval, 樹木 un arbre, 植物 une plante のような我々の感覚の対象を表象する言葉であったと考えるのが当然である。こうした言葉は眼に見える実体に基づいている。私はこれを単純語 mots simples と呼ぶ。次に, 大きい grand, 小さい petit 等の形容詞, 死ぬ périr, 生れる naître, 愛する aimer 等の動詞が示すように, もろもろの対象の間に存在するもろもろの関係を示すための言葉が求められたのであろう。こうした関係は, 単純語におけるような物質的現実に基づいてこの種の言葉を定めるのではないが, それでもなお眼に見えるものである。先ずこうした関係は人間の器官に応じて変化し易いからである。次にこうした関係は肉体的には見えない内面的活動を求める。そしてこの活動の必然性そのものが, こうした言葉は他のものの後にしか考えつかれなかったことを証拠だてるのである。この第二の種類は混合語 mots mixtes と呼ばれ得る。最後に, この技術の最後の努力は第三の種類言葉の創造であった。この言葉は論争の永久の糧なのだが, こうした言葉は如何なる現実の実体をも, 如何なる眼に見える関係をも原因としていない。こうした言葉は, 多かれ少なかれ多数の関係のもろもろの集合を, しかし単純語や混合語の根拠の単純さとは程遠い諸関係を我々の心のなかに起させるのである。これが天才的能力 génie, 美德 vertu, 学問 science, 無限 infini, 神 Dieu 等の言葉である。」(f° 4表<sup>11)</sup>)

Folio 4 は, この第三の種類に最初原稿 (f° 5表, 裏<sup>12)</sup>) で明記された「抽象語」mots abstraits なる名称を与えることなく, 頁の終りのここで筆が絶たれている。なお「この言葉 (抽象語) は論争の永久の糧なのだが」のところの「論争」«disputes» に「宗教の」«de religion» なる文字が最初書かれ, それが消されていることは, 抽象語から出発する観念論的立場と単純語から出発する感覚論的実証主義的立場との論争を特殊化しないための配慮であろうことが推察される。

ここで最初原稿 (f° 5 裏<sup>13)</sup>) に戻ろう。ここには, 抽象語を含む観念集合の定義は真の学問であることが付記され, 更に単純語に限定される未開人種があり, そのうちの唯一

の人間が人種全体の知識に等しい知識をもつこと、更に抽象語が殆んどない、或いはそれが多い他の民族が存在すること、ヨーロッパの諸民族は言語が豊富なこと、しかし人間のすべての感覚と観念とを表現できるほど豊かな言語はかつて存在しなかったことが書かれている。

Génie なる言葉の「曖昧さをすべてとり除く」(Ibid.) ために、Balzac は言語のなかでそれを位置づける原理としてのこうした言語理論を立てた後で、génie なる言葉の「最も広い最も多く理解される意味を探究しなければならない」(Ibid) と意図するのであるが、この言葉が含む観念集合の具体的分析が行われないうえ、この意図は果されないままに残るのである。

## 3

次に Balzac は天才的能力の条件を解明するための前提として知能の心理学的分析に入る。言語が観念の記号であるとするならば、観念の形成過程を分析しなければならないからである。彼はここで、言語以前に観念を研究する Locke の立場とは反対に、Condillac の立場に従って、言語の分析の後に彼の思考理論——「魂と感覚とについての私の体系」(A 157 f° 95裏) を展開することになる。Balzac は Descartes 批判のノートのなかで、〔思考の実在を実存的に確認する〕Descartes は思考を分類するのみで「思考が如何にして生みだされるかを探究し」(A 157 f° 98表) ないことを批難している。([ ]内は筆者の判断) 彼はこの Descartes 批判をここで理論的実践に移しているのである。

「人間のうちには力能 puissance<sup>④</sup> がある。この力能は人間とともに生れ、成長し、死滅する。それが人間とともに死滅するのは、その結果が始まり、増大し、減少するのを我々が見るからであり、また人間が死滅するのを見れば、人間の様々の局面に従った力能も人間とともに死滅するのは当然であるからである。人間は、光に向って眼を開く瞬間に、ものを食べる瞬間に、歩きながら躓く瞬間に、この力能を行使する。眼に当る光は、吸いこむ牛乳は、足にあたる小石は人間のうちに何らかの結果をひき起す。この結果を私は感覚と呼ぶ。人間ではない実体によって生みだされたこの感覚は、力能の座に極度の速さで伝えられ、自然がなし得ることを一挙に示す限りなく的確な未知の記号で刻印される印象を生み出すのである。力能が隠されている、人間の触知できぬこの点に伝えられたこうした印象に基づいて、力能は判断を形成するのである。この判断を私は単純観念 idée simple と呼ぶ。」(f° 5 裏<sup>14)</sup>)

④ 人間の精神に内在的に潜在する力、能力をさすもので、「力能」という新語をつくり、これによって訳してゆくことにする。Balzac はこの論文の後の方で、これを「私は魂と呼びたい」と断っている。

「しかし第二の精神活動が存在する。それは、二つの単純観念の比較とそれらの間に存在する諸関係とが生み出す他の種類の観念である。この新しい観念はもはや、我々ではない外部の実体に基づくのではなく、そうした実体が我々のうちに産みだした印象に基づく

ことを観察しながら、これを複合観念 *idée composée* と呼ぶことができる。そして印象をこの力能の変様 *modification* と考えるとすれば、印象を我々に属するものと見做すことができるのである。何故なら印象はあの推定された記号によって刻印されているのだから。それ故に第二の観念はいわばこの力能そのものの感覚であることが分る。この種の観念の領域は遙かに広大なものとなる。何故なら単純観念の原因である感覚を我々に与える実体の数が多いとすれば、単純観念相互の間に存在する諸関係の数もまた更に多いのであるから、故に二種類の感覚が存在する。それは単純観念を産みだす身体的感覚 *sensation corporelle* と、複合観念である知能的感覚 *sensation intellectuelle* とである。この二種類の感覚は等しく我々のうちで起る。しかし第一のものは身体とその内在的力能とに対して働きかけるのにひきかえ、第二のものは力能に対してのみ、そして力能のなかへのみ働きかけるのである。(f° 5裏, f° 8表<sup>15)</sup>)

この二つの観念の分類は明らかに Locke から借用したものであろう。ただ Locke においては単純観念を感覚のそれと内省のそれとに再分類しているのに対し、Balzac は後者を複合観念に含ませる等、Locke の精緻な分析を単純化することによって「以前に考えだされた分類を倒そう」(A 157 f° 95裏) とする独創を志向する彼の体系を示そうとする。なお Descartes についてのノート (Ibid.) ではこの分類は自然的観念 *idée naturelle* と純理的観念 *idée rationnelle* とになっている。

上記のテキストのなかで、印象は力能の変様である故に複合観念は力能の感覚、即ち知能的感覚であるとされていることには、論理の飛躍が感じられる。この飛躍を「魂の不滅についてのノート」(A 157 f° 41) における彼の *syllogisme* の発想法<sup>16)</sup>によって説明することも可能であろう。このノートで Balzac は、Malebranche にとって、感覚は精神の変様であり、運動は物質の変様である〔Malebranche は実際にはこうはっていないのだが〕故に、彼 (Malebranche) の考えでは運動は物質にとっての感覚である、と結論している。この奇妙な *syllogisme* をここに適用するとすれば、複合観念は力能の変様である印象に基づいているので複合観念もまた力能の変様であると仮定した場合、「感覚は精神〔力能〕の変様である」(Malebranche) 故に、複合観念は力能の感覚である、と結論することもできるのである。しかしテキストでは「〔複合観念〕はいわば (*pour ainsi dire*) この力能そのものの感覚であることが分る」と書かれており、「いわば」という前書きがあるので、これは、Balzac の念頭に常にあった身心の対応関係を示す直観的比喩的表現として「身体的感覚」に対応させていると見る方が自然であるように思われる。「魂の不滅についてのノート」(A 157 f° 62 裏) で「身体感覚機能の結果が、魂の感覚、即ち反省である。」と無雑作に書かれていることはこれを裏書きする。

「感覚、力能、観念というこの三つのものによって人間は学問を構成したのであり、この三つのものの人間のなかでの組立てられ方によって、人間は学問に或いは天才を、或いは凡才をもちこむのである。」(f° 8表, f° 5裏<sup>15)</sup>)

次に Balzac はすべての人間がもっているこの力能が、その感覚、即ち複合観念と同

様に、物質的なものであるとする唯物論的見解を示す。

「この力能は他のものよりも更に繊細な、更に広大な、更に広い第六の感覚機能であるならば、力能は、「私」ではない、力能の感覚〔これは前の定義に従って複合観念とみるべきだろう〕と同様に物質的である。〔力能の感覚が「私」ではない〕というのは、もし音と楽器とは別個の二つのものであることを一応認めるならば、感官と感覚とは、魂と観念とは別個の二つのものであるからである。それはともかくとして、この力能は幾つかの種 (des espèces) を含む類 (un genre) なのである。そして類の組織と状体とはこうした種の不完全さに左右される。」 (f° 8表, f° 5裏<sup>17)</sup>) 〔 〕内は筆者)

ここで Balzac は力能の機能を、記憶と、意志と、想像と、判断と、諸関係を考えだす能力とに分類するにあたって、力能とは分割できない統合された一つの有機的機能であるが、人々の理解に便利のようにこれを分類するに過ぎないことを主張する。<sup>④</sup> そのために力能を一つの類として、力能の幾つかの特性を類の種として分類するのである。これらの種は力能の本質ではないことを強調する。彼は Descartes に関するノート (A 157 f° 95 裏) で、Descartes が精神を意志と知性とに区分したことを批難して、「彼は分割できないものを分割する。神は別たれることができない。しかし神が原因である事物、もろもろの結果を分けることはできる。」として、観念は力能 (精神) の結果であるという理由によって、このノートの表現では「自然的観念」と「純理的観念」(単純観念と複合観念とにあたる) とに分類するのである。

④ Balzac はこれより少し後の個所で、この五つの特性に「仮定された」(supposées) という形容詞をつけ、後で恐らく行き過ぎた表現とみて消しているところをみても、これに近い考えをいっていたのであろう。

「こうした種は記憶と意志と想像と判断と諸関係を考えだす能力とである。力能を定義してこれを理解するためにこのように力能のなかに区劃の線が引かれるこの五つの種は、力能そのものではない。それは力能の本質ではなく、力能のもろもろの特性なのである。これと同様に、人間の精神に地球を一步一步遍歴させその広大さを我々の小さい器官に適応させるために、地球や全宇宙を想像上の線〔緯線や子午線をさす〕でとり巻くのである。」 (f° 5 裏, f° 8表<sup>18)</sup>, 〔 〕内は筆者)

上記の paragraphe の最初の五つの分類の原稿における文字の修正は、彼が最初 «la mémoire, l'imagination, le don et la faculté d'inventer, le goût, l'esprit et le jugement» と書いたことを示している。l'esprit は l'es とだけ書いてすぐ消して et le jugement と書加え、二つ目に la volonté を欄外に加え、le goût を消し、三つ目を la faculté d'inventer des rapports と修正して最後に置いた形跡が読みとられることは、彼の分析のためらいを示している。また「魂の不滅についてのノート」では、魂の能力として「過去のためには記憶、現在のためには判断、未来のためには想像」(A 157 f° 60) の三つを挙げていること、同じノートで「物質的な感覚機能と同様に五つの精神的な感覚機能が存在する筈である。」(A 157 f° 62) と記していることは、Balzac の思考傾向に分析の厳密さよりも体系



の精神が優っていることを示してはいないだろうか。そして五官と同様に五つの精神的な感覚機能が存在する筈であるという発想には、「我々の身体の能動と受動との秩序は、本来、精神の能動と受動との秩序に一致する」(「倫理学」第三部、定理二、備考の始め)と考える Spinoza の影響が感じられる。Balzac はこの頃「倫理学」第一部の冒頭を仏訳している。(A 9, f<sup>os</sup> 2-5, Cahier de morale)

テキストに戻ろう。「人間の身体、感覚、単純観念と複合観念、この内在的力能、そしてその五つの種すなわち特性は、多くの哲学者が彼らの論究においてそれらの結果とそれらの原因とを混同した程、こうしたものは相互に依存し合い、迅速な速度でこうしたものの様々の活動のなかでまざり合うのである。哲学上の異説や学派の差違はこれに由来する。しかし今迄のところ、だれでもが私が立てた原理を認められると思う。私は事実についてしか推理しなかったからだ。誰も、一般概念が示された力能を、感じられる感覚を、その結果である観念を、そして我々の精神のなかでの組合せの最後の段階である複合観念を否定することはできない。私は、魂と呼びたい内在的力能の五つの特性に関しては、懐疑論者の厳しい眼をもってそれを検討しよう。こうした検討は、すべての魂の間に存在する差違の探求に、人間がもち得る天才的能力の、才気の、凡庸さの、愚かさの、狂気 of 定義に我々を導くであろう。」(f<sup>o</sup> 8 表<sup>18)</sup>)

ここで Balzac は、génie の条件を解明するための他の前提として、人間の魂の能力の差違の原因の検討に入るのである。

## 4

Balzac はここで鉱物、植物、動物の各領域におけると同様に、人間の魂、魂の特性、人体構造の各々に同じ類似性と同じ相違性とが存在することを述べて、こうしたものが各地域の気候の影響による類似性であり、相違性であることを先ず主張しようとする。「ひとびとはその理由を遠くに探し求めたが、それは我々の傍に、我々の前にあるのだ。」(f<sup>o</sup> 8 表)

「実際、今までに反対する者がいなかった真実があるとすれば、それは人間の器官の間に存在する相違である。更に明らかなことは、或る気候に住む人間は、或る他の気候に住む人間とは別な影響を受けることであり、それぞれの気候には気温に応じる習慣をもつ一部の人たちがいることである。Mexique の人間は Labrador の人間とは全く異なった人たちであり、彼らの間の著しい相違は、他の人たちの間ではその祖国に応じて相違はあるにしても少なくなる。私は、気候説 système des climats を繰返していると言われるだろう。私が言っていることが真実なら、あなた方がそれを認められるなら、それが新しくても旧くても構わぬではないか! 真実なら、採るがよい。誤っているなら否むがよい。しかしこれは異議をはさむには余りに明らかな事実なのだ。」(f<sup>o</sup> 8 表、裏<sup>19)</sup>)

Système des climats は Hyppokratès 或いは Montesquieu 以来余りに有名な学説なので独創性を好む Balzac はこのように断ったのであろう。Voltaire より前に Montesquieu は

Hyppokratès から、土地、気候、食物が動物や人間に一定の特性をもたらすという思想を借用し、身体と精神との間の必然的関係を示して個人と民族との気質や習俗への気候の影響を論じた。(Essai sur les causes qui peuvent affecter les esprits et les caractères et l'Esprit des lois.) Madame de Staël はこの思想を文学に適用して、北方と南方との諸民族の感受性、習俗、想像力、哲学への気候の作用を分析した。(De la Littérature, ch. XI, XVIII と De l'Allemagne) この頃 Balzac が読んでいた Malebranche は、La Recherche de la Vérité の第2巻第3章を「ひとが吸う呼吸もまた精神に或る変化をひき起す」と題している。彼はこの章において、呼吸系統や発汗系統を通じて、心臓や脳髓のなかの血液の動物精気に空気が作用する生理学的な道順を示して、「様々な国々の人々の精神の色々な気分と様々な性格」と彼等の想像力の相違とを説明する。(Œuvres complètes Tome I, Recherche de la Vérité, Livre second, ch. III, chez J. Vrin, 1962 p. 201-203) Charles Bonnet は言語の構造への気候、生活様式、教育の影響に留意している。(Contemplation de la Nature) Gall は次のように考える。「土地と気候とは人体組織を変え得るのみならず、脳髓の諸部分の成長と形体とを著しく変え、個人の集団の知的情意的素質に一定の恒久的性格を刻印し得る。」(Précis analytique et raisonné du système du Dr Gall..., par N. J. Ottin, 5<sup>e</sup> éd., Crochard, 1834, p. 31)

しかし最も確実な影響は Cabanis であることが推定される。Balzac がこの頃 Cabanis の *Rapports du physique et du moral de l'homme* を読んだという事実上の証拠はない。しかし当時の Balzac の発想法にはその類似が顕著なのである。Cabanis は、感覚の受容の仕方が観念と感情との形成を支配すること、そしてそれは個人に応じて変ることに注目する。この差違の要因として、年齢、性、気質、病気、栄養摂取、気候が挙げられる。Balzac は後にこれを多くのものに利用するが、ここでは気候のみに関心を示している。Cabanis は、各民族には言語に劣らず各々を区別する外形的特徴があること、各民族の住む版図に土地の甚だしい相違がある場合、様々な地方のそれぞれの住民に固有な或る類似した相違に、即ち人体構造、皮膚の色、顔貌のあるニュアンスに土地の相違の写しが常にみいだされることを、主張する。(Corpus général des philosophes français, Auteurs Modernes. Tome XLIV, Œuvres philosophiques de Cabanis, texte établi et présenté par Claude Lehec et Jean Cazenueve 2 vol. P.U.F. 1956, t. 1, p. 473) Balzac は Cabanis のこうした具体的な表現や、彼の証明の緻密な展開や、気候を構成する要素の彼の分析には従わないが、彼と同様に鉱物界、植物界、動物界、人間界の各々の全領域間における類似と相違とを確証する普遍的法則に注目するのである。

Balzac は続ける。気候を要因とする「こうした身長、器官、体格の相違は従って諸民族の間に存在する。しかし各民族を別々に考えるならば、更に他の相違が存在するのである。各民族の大きな相違のほかに、一民族の各個人においては視覚器官、触覚、嗅覚は多様化しているのである。ところで我々の感覚系統は感覚を受けるために自然が設けた唯一の器官であるのだから、我々が感じるすべての感覚は感覚相互の間で、民族に対しては気

候に応じて、同じ風土の個人に対しては彼等の人体構造の差違に応じて、類似しまた相違すると考えることが本当らしい。」(f° 8 裏<sup>19)</sup>)

Cabanis の中心的観念は次の如くである。「精神的習慣」とは、人間が毎日外部の事物から受ける「印象の必然的産物」であり、「この印象が生む観念或いは判断の、またこの同じ印象とこの判断とが協力して発展させる本能的或いは推理的意志の、必然的産物でもある。」(Ibid., p. 465) しかし印象の種類と性格とは、それをひき起す事物の性質と、感覚器官が存在する身体的構造とに依存する。もし気候が事物の性質を決定するならば、他方もし気候が、感受性を変え気質をつくるところの幾つかの肉体的状況（栄養摂取、労働の性質、病気の如き）を条件づけるならば、そうしたことから気候が精神的習慣の形成に影響する結果となるのである。この精神的習慣とは「それぞれの個人の生活における観念と判断との、また本能的もしくは推理的意志の、そしてこの双方から結果する行為の、全体にほかならない。」(Ibid., p. 467) Balzac がこの推論の方法の影響をつよく受けていることは否定しがたいところである。Cabanis は他方人間の気質の個人的要因に留意することを忘れない。彼は、副次的要素により変化させられ、もしくは偶然的要素により決定されて「得られた」気質のもとでは、「原初的人体組織に依存する或る根底」が気質のなかに存続することを明確にしているのである。(Ibid., p. 476) Balzac は Cabanis の綿密な推論を単純化し、感覚の類似と相違との要因を民族に対しては「気候」に求め、同一風土の各個人に対しては個人固有の「人体構造」conformation に求めているのは、上記の Cabanis の所説の借用によっていることが推定されるのである。

ところが Balzac のこの二つの要因に根ざす主体は「感覚」に限定されているが、原稿には、Cabanis に従って「観念」(単純観念と複合観念)をも含ませようとして最初これを書き、考えなおしてこれを削除した跡が残っている。(f° 8 裏) 従って Balzac には執筆前に既に秩序づけられた体系があったわけではないのである。彼は書きながら推理と分析に苦渋しつつ、ここで Cabanis を離れて自らの独創を誇ろうとする。

「そのことから、我々のすべての観念が気候や人体構造に応じて類似し相違するという結果にはならないのである。これは単純観念に対しては確からしいことであるかも知れない。しかし複合観念はこのシステムに入ってはならないのであり、それは当然な理由によるのである。我々には我々の身体的感覚は自由にはならないが、我々の知能的感覚は多少はもっと自由になるのである。感覚は一瞬つづく。一瞬が過ぎると、感覚を力能の座へ運んだ後では、感覚はもう存在しない、そして私の感覚器官はもう反響はしない。しかしこの力能がもたらす判断が残る。そしてこの判断は、この観念は従ってすべての人たちにおいて異なるのである。何故なら各人の力能は自らの流儀で判断するからである。既に見たように、複合観念であるもろもろの関係を、考えだしながら力能が作用するのは、この単純観念に基づくのであって、もうそれは感覚に基づくのではない。だから単純観念の刻まれ方に複合観念は依存する。そして力能の五つの特性の完成度が、関係の発見の仕方に影響する。これが力能に相違をもたらすので、単純観念は常にといてもよいほど似てい

るにかかわらず、複合観念には殆んど類似はないのである。」(f°8 裏<sup>20)</sup>)

Balzac は単純観念の扱い方に関しては明らかな論理的矛盾を示している。彼は、同じ風土内の各個人の感覚は人体構造の差違に応じて類似しまた相違することを提言した。従って感覚から生れる各個人の単純観念も相違する場合がある筈で、他方、感覚が過ぎ去った後で残る単純観念は、各人の力能が自らの流儀で判断した結果であるから、個性化されることが主張された。そのすぐ後で「単純観念は常にといてもよいほど似ているにかかわらず」と結論されているのである。

「この内在的力能のなかでその作用が同一である多くの感覚を、私が含ませる全体の名称に過ぎない、記憶と私が呼ぶものは、感覚を確実に判断し、判断ならびに観念間の諸関係が即座に念頭に浮ぶように、判断を想起する作用を忠実に保存する能力のうちに存するのである。実際、私が触れた木の硬さを私に思いだせる精神作用は、私の内在的力能に対する感覚なのである。そしてこうした感覚は私が思いだすものに応じて異なるので、記憶とは、私が既に定めた第二の種類の感覚の組合せである。そして記憶は天才の第一の条件である。」<sup>②</sup>(f° 8 裏<sup>20)</sup>)

② Balzac はこの行の右の余白に太字で《Pourquoi?》と記している。恐らく彼は「記憶は天才の第一の条件である」理由を後に敷衍する積りであったのであろう。

こうして Balzac はようやく天才の最初の条件に到達する。

次に Balzac は恐らく想像力 *imagination* を天才の第二の条件とするために想像力の分析に趣くのであるが、不幸にして未完に終わっている。ここでは想像と記憶との対比が行われる。「想像は一種の記憶である。記憶が観念の想起であるならば想像は心像 *images* の想起である」という定義で始まる文章の内容は次のようである。心像とは、例えば崩れる塔、革命で突然覆った大帝国、雷に打ち倒された樹木といったものの比較から生れる。従って記憶が樹木、塔、雷、つまり単純観念に基づくのに対し、像想は複数の物を想起し、もろもろの関係を発見する複合観念に基づく。動物は前者に、人間は後者にかかわる。これは力能の機能の差による。動物は限界内に止まり、人間は自らに欠けているものを感じるので限界を越えようとする。(f°8 裏, f° 9表<sup>21)</sup>)

ここで筆は絶たれている。詩的天才の重要な条件である想像力の解明と分析がこのような形で終わっていることや、前述の論理の混乱や、分析的論理の粗笨さは、彼が天才の条件の理論的究明という余りにも大きな問題にとり組んだ、自らの推理能力への彼の過信の結果とみるほかはないであろう。しかしこの過信そのものが、彼の一生につきまとう、可能性への限らない情熱とヴィジョンとの前兆である。Cabanis が「人間には、自らの能力が規定されている限界を越える真の必要というものは決してないのだ。人間が知り得ないものは人間には無用なのだ。」(X° *Mémoire op. cit.* p. 515) と宣言しているのに対して、恐らく Cabanis の読者であった Balzac はこれに反逆して次のように書くのである。「たしかに、幾多の全世紀がこの「魂とは何か」の問題の解明を果し得ずに過ぎ去ったのであるから、私は人間の精神に限界を規定するところではないのである。幾多の学問は我々には未

だ知られていないのであるが、恐らくそれは何時の日か人間を驚かすであろうし、人間の力の偉大さを悉く人間に漏らすであろう。」(「魂不滅論」の冒頭, A 157 f° 90<sup>22</sup>), ( )内筆者)

Cabanis にとっては、もろもろの第一原因は「それが第一なるそのことの故に、知り得ない<sup>②</sup>」(Second Mémoire, *op. cit.* p.198) のであるが、Balzacはこの *Dissertation* の序言においても「もろもろの第一原因はもはや秘密ではなくなるであろう」日に熱い期待を寄せていた。また Balzac は民族に対しては「気候」の、同一風土の個人に対しては「人体構造」の決定論の適用を、躊躇逡巡しながらも、遂に感覚にのみ止めて、少なくとも複合観念に関しては天才的能力の位置づけのためにその自由化と個性化の理論によって、Cabanis の未開拓の領域を切り開こうとしたことは、既に我々がみたところである。ここに、かくも深い豊かな影響を受けている Cabanis を自らのうちに同化しつつ、未熟ながらも Balzac 独自の système を築こうとする、彼の精神における創造の闘いを見なければならぬであろう。こうした傾向は、他の領域における Descartes に対する、Spinoza に対する、Locke に対する態度にも顕著に現われている。

② Cabanis は晩年には「もろもろの第一原因」を扱うことを拒んではいない。しかし彼は科学的確実性に基づく哲学的研究と、自由な仮説を伴う形而上学的思弁とを区別している。

単純観念と複合観念とを主軸とするこの習作は、若き Balzac の野望にもかかわらず、遂に単なる天才論の未熟な序論に終わってしまった。しかし彼の最初のこの小論文に、将来の小説家ならびに思想家としての Balzac の観察と直観との、実証と創意との、事実と夢想との、絶えざる闘いが垣間見られないであろうか。

#### 〔註〕

- 1) 『Balzacの初期の哲学思想(I)―当時の思想環境と *Notes philosophiques*(1)』は広島大学教養部紀要 I「外国文学研究」Vol. XV, p. 243-287. 所収。  
 《*Notes sur l'immortalité de l'âme*》については同上 p. 259-276.
- 2) *L'Année balzacienne* 1968, p. 91-93.
- 3) Ibid. p. 95.
- 4) Ibid. p. 94.
- 5) Ibid. p. 94-95.
- 6) *Correspondance*, Garnier, t. I p. 36. p. 41. p. 42. p. 60. p. 61.
- 7) *L'Année balzacienne* 1968, p. 95.
- 8) Ibid. p. 95.
- 9) Ibid. p. 97.
- 10) Ibid. p. 102-103.
- 11) Ibid. p. 103.

- 12) Ibid. p. 96-97.
- 13) Ibid. p. 97.
- 14) Ibid. p. 97-98.
- 15) Ibid. p. 98.
- 16) 広島大学教養部紀要 I 「外国文学研究」 Vol. XV, p. 269.
- 17) *L'Année balzacienne* 1968, p. 98-99.
- 18) Ibid. p. 99.
- 19) Ibid. p. 100.
- 20) Ibid. p. 101.
- 21) Ibid. p. 101-102.
- 22) *Œuvres complètes* (Club de l'honnête homme), vol. 25, p. 560.